気が付いたら、攻略されそうです・・・～西村舞編～

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気が付いたら、攻略されそうです・・・～西村舞編～

【Ｎコード】
Ｎ６６４７Ｚ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
目が覚めると、俺は女の子になっていたしかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたらゲームのキャラになっていて
しかもメインヒロインとなっていた。
このままどうなるのか？全く解らなかったが、とりあえず
「主人公とのラブイベントを回避」と言う方針で動く事に決める。
そんな、性転換した彼女の物語
気が付いたら、攻略されそうです・・・の番外編みたいな感じだと思います。

～プロローグ～キャライラスト付き～（前書き）

零堵です。
投稿します。
一月六日、キャライラスト追加。

～プロローグ～キャライラスト付き～

＞i38551－2971＜

キャライラスト、西村舞

気がつくと、そこは見知らぬ天井だった。

「あれ・・・ここは・・・・・って、声が！？」

自分の声を聞いて、驚く。

何故なら、女の声だったからで、少なくとも男の声ではなかった。

慌てて体を確認してみると、大きい胸をしていて、これでもう自分が、男では無く

女になったんだと、実感してしまった。

「何でこんな事に・・・？確か、俺は、家でゲームをしていたのに」

どうしてこうなったのかよく、思い出してみる。

家でゲームをしていて、気がついたら、この場所にいるのであった。

あまりの突然の事で、パニックになったが、冷静に考えて
ま、なっちゃた物はしょうがないか・・・諦める事にした。
ところで、一体誰になったんだ？と思い、鏡を探してみる。
部屋の中には鏡は無く、あるのは、勉強机とベット、それに箪笥ぐらいだった。
これじゃあ、自分が誰になったのか、全く解らなかったので、部屋の外に出てみる。
廊下はちょっと広く、なんか見覚えがある光景だった。
鏡がある部屋を見つけたので、そこで自分の姿を見てみて、驚いた。
「え・・・西村舞！？」
そう、俺の姿は、西村舞となっていたのである。
しかも既に、制服の姿になっていた。ちなみに西村舞と言うのは
ゲーム「ラブチュチュ」のメインヒロインである
幼馴染の初崎孝之と隣同士の家で、よく孝之の事を起こしに行く、
ギャルゲーとかに出てくる
よくあるヒロインなのであった。
「という事は・・・ここは、ラブチュチュの世界なのか！？」
そう言ったら、俺に声をかけて来る者がいた。
「舞、どうしたのよ？」
赤い髪をして、ショートカット姿で、舞の顔に少し似ている人物だった。
と言う事は・・・この人が、西村舞の母親
西村恵子さんだと思う。
「い、いや、何でもないよ」
「そう？それより、孝之君、まだ寝てると思うから、起こしに行くんじゃないの？毎朝、そうしてたじゃない？」
「あ、う、うん、じゃあ、行って来る・・・」
ここで、いつもと違った行動をすると怪しまれるので、外に出る事にした。
外に出て、隣の家に向かい、ゲームと同じ台詞を言う。

「孝之～起きなさい！朝だよ～」
そう言ってから、数分後
「舞、そんな大きな声で言うなよ、恥ずかしいだろ！？」
そう言って出て来たのは、主人公の初崎孝之だった。
改めてみてみると、結構なさわやか青年って感じがして、なかなかの美形だったりした。
こいつが、色んな女の子と付き合う可能性がある奴か
なんかむかつくな？このリア充め！
そう思っていると
「舞、学校だと言うのに、手ぶらで来たのか？鞄忘れてるぞ？」
「あ、確かに・・・ちょっと持ってくるよ、先行ってて」
「いや、待ってる」
何でだ？と思ったが、まあ深く考えない事にして、自分の家に戻り鞄を持ち出して、外に出る。
そして、主人公と一緒に登校する事になった。
登校途中
「そろそろ夏だよな～」
「な、夏？」
「夏だよ、明日から七月じゃね～か」
「そ、そうなんだ」
「どうした？舞？なんか変だぞ？」
「い、いや、大丈夫よ、気にしないで」
「そうか？」
と言う事は、今日は六月三十一日で、明日から七月に突入って事なのか・・・
確か、ゲーム「ラブチュチュ」だと、七月八日で、ゲームが終了した筈なので
これからどうするか・・・考えて、結論はと言うと
「主人公とのラブイベントを回避」すると言う方針で動こうと思った。

この先何が待ち受けているのか、全く解らなかったが
何とかやっていくか・・・と思い、学校へと向かったのである・・・

～プロローグ～キャライラスト付き～（後書き）

気が付いたら、攻略されそうです・・・のキャラ変更編です。
まあ、番外編？みたいな感じかもしれません。
この物語は、暇ができたら、投稿したいと思います。

～第一話～一日目～学校潜入～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第一話～一日目～学校潜入～

主人公の初崎孝之と歩いて、辿り着いた場所は
「私立白稜高校」と書かれていた。
うん、ゲームとまったく同じ名前の学校なんだな・・・
と言う事は、ここの世界は、ラブチュチュの中の世界なのか？とか思ってしまった。
「どうした？舞？」
「ううん、何でもないよ」
「そうか？ま、いいけど」
そう言って、主人公はスタスタと校舎の中に入っていく。
俺も、中に入り、自分の上履きを探して、何とか見つけて、それに履き替えて
自分のクラスを探す事にした。
ゲームどおりなら・・・と思い、二年二組の教室の中に入る。
教室の中に入っても、誰も驚かないので、やっぱりここで合ってるんだな・・・と実感し
ゲームと同じ席に座る。
隣に主人公の孝之がいて、窓際にもう一人の攻略対象キャラの沖島ユウが座っていた。
沖島ユウがいるって事は、やっぱりここはラブチュチュの世界なのか・・・
ま、来ちゃったものはしょうがないとして、何とかなるだろ～な・・・と思う事にした。
そして、キーンコーンとチャイムが鳴り、先生が入ってくる。
先生は男の先生で、声を聞くと、やっぱりゲームに登場した先生の声と全く同じだった。
授業内容は一体どんなんだ？と思い、とりあえずまじめに聞いてみると

元いた世界と全くと言っていいほど、変わってはいなく
普通に問題が解ったりしたので、何とかなった。
時間が過ぎていき、お昼になった。
お昼は、どうしようか・・・と悩んで
この世界だと、学校に学食があるので、そこに行く事にした。
学食に行こうとすると
「あれ？舞、今日は弁当じゃないのか？」
孝之が話しかけてきた。
そうか、確か、舞は毎日弁当を作って、教室で食べてたな？そういえば・・・
「ちょっと、寝坊しちゃって、用意してないの」
「何言ってんだよ、俺の事、朝、迎えに来たじゃないか？少なくとも、作る時間はあったはずだぜ？」
「でも、作るの忘れたの、だから学食行くのよ、何か文句でも？」
「いや・・・ただ、いつもと違うなって思っただけだよ、俺も学食行こうかな・・・」
そんな事を言ってたので、ほっとく事に決めて、学食に向かう事にした。
学食に着くと、人がたくさんいて、券売機の前に並んでいる。
俺もその列に並んで数分後、俺の番になり、何にしようか悩んで、きつねうどんを押した。
お金を入れる投入口がないので、無料って事には驚いたが、深く考えない事にした。
きつねうどんの食券をカウンターに置くと、すぐにきつねうどんが出てくる。
空いている席を見つけたので、そこに座って食べる事にした。
移動してて思ったのだが、胸が大きいから、歩くのに少ししんどかった。
とりあえず思ったのは、自分が女になるんだったら貧乳、見るんだったら巨乳だな・・・と思ったのである。

きつねうどんを食べ終わって、教室に戻り
これからの事を考える。
この体、西村舞になったと言う事は、主人公とのラブイベントはあるわけだから
それを回避するには・・・と、考える。
とりあえず誘われたら、断ると言う方針で動こうと決めて
午後の授業に専念する事に決めたのであった・・・

～第一話～一日目～学校潜入～（後書き）

こっちの物語も投稿します。
お気づきかと思いますが、「気が付いたら、攻略されそうです・・・」と違う所がひとつだけあるのを解りますか？
そう、違うのは、日付なんです。
あっちでは、七月一日が月曜日となっていましたが
こっちでは、七月一日は火曜日となっております。
よく確認してみると、解りますよ～
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第二話～一日目～午後、部活動～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二話～一日目～午後、部活動～

午後の授業も普通に終わった。
授業が終わったので、どうしようかと思ったが、確か
西村舞は、部活動に入っているので、部活動に参加する事に決めて教室を出る。
西村舞の入っている部活は、陸上部なので、グラウンドに向かった。
グラウンドに向かうと、ジャージを着てホイッスルを首に掲げているいかにも
体育教師らしき人がいて、ジャージのネームプレートに「山本」と書かれてあった。
「西村、まだ、着替えてなかったの？部室で着替えなさい」
「え～っと・・・部室って・・・」
「忘れたの？あそこよ？」
そう言って、プレハブ小屋を指差す。
「あ、はい、あそこですね、じゃあ、着替えてきます」
そう言って、俺は、プレハブ小屋の中に入る事にした。
中に入ると、他の人が着替えていたりしている。
これって、男だったら天国な光景なのではないだろ～か？
まあ、俺は女になってしまったので、ちょっと残念な感じがしてしまった。
空いているロッカーを探していると、西村と書かれたのを見つけたので、そこを使う事にした
ロッカーの中に入っていたのは、青色のジャージとズボンだった。
うん、ブルマ姿では走らないのか・・・
まあ、ゲームの中でもブルマ姿は見た事がなかったからな・・・
俺は、着てる制服を脱いで、ジャージに履き替える。
うん、胸が大きいから着にくかったが、なんとか着れた。
ジャージに着替え終わって、プレハブ小屋から出て

先生らしき人に指示された通りに、並ぶ事にした
「じゃあ、今日は、百メートルのタイムを測るわ、皆、準備して」
そう言って、走る準備をしているので、俺も準備する事にした
他の人のタイムを見てみると、速い人がいたり、遅い人がいたり、
結構まばらだった。
「はい、次、西村」
「あ、はい！」
俺も、スタート位置に並ぶ。
山本先生が、ホイッスルを口にくわえて、こう言った
「よ～い、スタート！」
そう言ったので、俺は走り出す。
走り出して思ったのだが、胸が大きいので、走りにくく、バランスが悪いので
転びそうになりながら、なんとか完走する事に成功した。
先生が、タイムを見て、こう言ってくる。
「西村、前よりタイムが落ちてるわ、この調子だと県大会には出せそうにないわよ？頑張りなさい」
「は、はあ・・・」
別に、頑張りたくはないんだがな・・・
そんな感じに部活をやって、夕方になった。
夕方になって、先生がこう言う。
「はい、今日の部活はここまで、各自体を十分に休めるように、では、解散！」
そう言ったので、俺は、帰る事に決めて、プレハブ小屋の中に入り
制服に着替えて、外に出る
外に出ると、もう日が沈んでいて、結構真っ暗になっていた。
寄り道しないで、俺はと言うと
真っ直ぐ、帰る事にしたのであった・・・

～第二話～一日目～午後、部活動～（後書き）

こっちの物語も、投稿します。
これも書いていて、ちょっと楽しいかも・・・って感じですかね？
これからも、よろしくお願いします。

～第三話～一日目～夜、西村家にて～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第三話～一日目～夜、西村家にて～

俺は、家に戻る事に決めたので、家に戻る。
西村家に戻った俺は、家の中に入った。
家に戻ると、母親の西村恵子さんがこう言ってきた。
「舞、お帰りなさい」
「ただいま、お母さん」
「もうすぐ、夕食が出来るから着替えて来なさい」
「は～い」
そう言って、俺は、西村舞の部屋に行く。
部屋の中に入り、早速服を脱ぐ事にした。
着てる制服とスカートを脱いで、下着姿になった。
下着の色は、赤色で統一されていて、上下とも同じ色だった。
うん・・・この姿を見て実感してしまうのは、結構なボリュームのある胸だという事だった。
一体何を食ったら、こんなにでかくなるんだ？と男だった俺には、こんなの経験した事はなかったので、興味本位で触ってみる事にした。
「・・・・ん・・・・あ・・・・」
形は、お椀形をしていて、触り心地は結構良く、なんか揉んでいて、ちょっと変な気分になってきた。
触っていて、声がつい出てしまった。
乳首が下着姿でも解るぐらいにツンと張ったので、もしかして・・・感じてるのか・・・と実感してしまった。
いつまでも揉んでいるのも何なんで、箪笥から服を取り出して着る事に決めて、箪笥を開ける。
中に入っていたのは、下着と色違いのスカートと夏物の服だと思われる洋服が入っていた。
男物の服が全くなかったので、仕方がないので、水色のポロシャツ

と赤いスカートを履く事にした。
スカートを履くのに、少し手こずったが、なんとか着る事に成功し、部屋を出る。
部屋に出ると、渋い感じの男の人が、俺の姿を見て、こう言ってきた。
「舞、見慣れない服装だな？いつもは、かわいい感じにしてるのに」
多分、この人がゲームの中でも登場した、西村舞の父親、西村新三郎だと思われる
ゲームの中でも「お父さん」と言っていたので、俺もそのままその言葉で、話しかける事にした。
「たまには、いいかな・・・と思って、変かな？お父さん」
「いや、変じゃないが・・・まあ、似合ってるぞ、さすが私の娘だな」
そう言って、おでこにキスしてきたので、ちょっと驚いてしまった。
何だ？このフレンドリーな父親は・・・、ま、まあ悪い人には見えなかったので、この家族は友好関係が非常にいいんだろう・・・と、納得する事に決めたのであった。
「あなた～舞？夕食出来たわよ～」
そう、言ってきたので、夕食を父親と取る事にした。
夕食に出されたメニューは、豚カツ定食みたいな感じだった。
「いただきます」
「いただきます」
そう言って、夕食を食べる。
うん・・・何というか、美味い。ご飯何杯も行けちゃう感じなのだが、すぐにお腹いっぱいになった。
この体は、そんなに大量には入らないらしい。実に便利な体だな・・・とか、思う。
「ごちそうさま」
「お粗末さまでした、あ、舞、これからどうするの？お風呂？それとも寝る？」

「う～ん・・・・自分の部屋で、ちょっと勉強してるよ」
「解ったわ、夜中まで起きてちゃ駄目よ？」
「は～い」
そう言って、俺は、自分の部屋に戻り、鞄からノートを取り出して、こう記す事にした。
「今日、どう言う訳か男だった俺が、西村舞の体の中に入っています、原因は不明、もどり方も不明、出来れば戻りたいのだが、その方法も不明・・・しかも、この世界はゲームの「ラブチュチュ」と非常に似ている。これからどうするかだが・・・このまま行くと、西村舞のイベントが起こるはずであるので、それを俺は、これから体験するのだろう、どういった展開になるのかは、不明だが、何とかやってみようとここに記す・・・うん、まあ、こんな感じでいっか・・・」
そう言って、時刻を確認してみると、結構遅い時間だった。
とりあえず、明日の予定表を見て、教科書やノートを鞄の中に入れて、ベットに潜る。
この西村舞は、毎朝主人公を起こしに行ってるので
明日も早めに起きなきゃいけないのか？と思い
ベットの近くにあるタイマーを朝早くに設定して、目を瞑る。
こうして、今日の一日が終わったのであった・・・

～第三話～一日目～夜、西村家にて～（後書き）

零堵です。
こっちの物語も投稿します～
この物語を、よろしくです。

～第四話～二日目～朝～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第四話～二日目～朝～

ジリリリと音がしたので、目が覚める。
目を開けて見えたのは、女の子の部屋だった。
元の男の姿に戻ってはいなく、鏡がないので自分の姿を確認は出来なかったが
胸が大きいので、確実に女だと思われるので、西村舞だと思う。
戻ってないのか・・・と、落胆したが、気を取り直して、時刻と日付を確認する事にした。
時刻は、朝の六時になっていて、カレンダーで確認してみると
七月一日の火曜日となっていた。
それを確認してから、部屋を出る。
部屋を出て、向かった先はキッチンだった。
キッチンで、この西村舞と言うキャラは、毎朝自分でお弁当を作っているので
俺もそう実行する事にしたのだった。
調理方法は、体が覚えているのか、難なくこなして、あっという間にお弁当が出来る。
味見をして見ると、結構美味く、西村舞って料理上手なんだと実感してしまった。
おまけに胸も少なくとC以上はあるので、男にモテモテな感じがする体じゃないか？とか
思ってしまい、そんな事を考えるのをやめて、お弁当を包んでいると
「おはよう、舞、今日も早いわね」
そう言って来たのは、ショートカットの髪をしている、舞の母親
西村恵子であった。
「あ、お母さん、おはよう」
「お早う、舞、私、これから朝食作るから、舞も手伝う？」
「うん」

俺は、そう言って、二人で、朝食を作る。
恵子さんも、手際がよく、あっと言う間に作ってしまった。
「お父さんは、まだ寝てるから、起きないから二人で食べましょう」
「は～い、頂きます」
「頂きます」
そう言って、二人で朝食を食べる。
うん、見た目もいいし、何より味が良かったので、直ぐに食べ終わってしまった。
食べ終わると、恵子さんがこう言って来る。
「舞、今日も孝之君の事、起こしにいくんでしょう？」
「う、うん、今から行くよ」
ここで断るのも怪しまれるので、俺はＯＫして、自分の部屋に戻る。
部屋に戻って、服を脱ぎ、私立白稜高校の制服を着る事にした。
二回目なので、時間はかかったが
着る事に成功し、鞄を持って、外に出て、隣の家に行く。
インターホンを鳴らすと、主人公の母親らしき人が出てきた。
うん、この人美人だな～って、見とれていると、彼女がこう言って来た。
「舞ちゃん、おはよう、今日も起こしに来てくれたのね？さ、あがって」
「あ、はい、お邪魔します、おばさん」
「おばさんじゃないでしょ？私の事は、お母さんと呼びなさい？」
「は、はあ・・・お母さん」
何で、お母さんと呼べって言ってるんだ？と疑問に思ったが、その自称お母さんに案内されて
主人公、初崎孝之の部屋にたどり着く。
孝之の部屋に入り、見てみると、布団をかぶって寝ている孝之を見つけたので、早速起こす事にした。
「孝之！朝よ！おきなさい！」
そう言って見たが、全く反応がなかった。

よし、じゃあこうなったら・・・攻撃を加えて起こしてみるか・・・
と思い、実行した。
「孝之、朝だよ～～！えい！」
原に思いっきり肘打ちを食らわせてみると、「ぐふ！」と叫んで、
布団から飛び起きる。
「いきなり何するんだ！・・・って、舞か！？今の！」
「そうよ、孝之が起きないから悪いんじゃない、朝よ？学校遅刻しちゃうでしょ？」
「頼むから普通に起こしてくれよ・・・」
「じゃあ、私、外で待ってるから、着替えて早く来なさいよね？」
「あ、おい・・・ったく、解ったよ」
そう言って、俺は孝之の部屋を出る。
そして外に出て、待ってると、制服を着た孝之が出てきた。
「よし、行くぞ、舞」
「ええ」
そう言って、二人で学校に向かう事になったのであった。
通学途中に思った事は、攻撃を加えて起こすのってちょっと癖になりそうだな・・・とか
思っていたのである・・・

～第四話～二日目～朝～（後書き）

タイトル名変更しました。
この物語も、よろしくお願いします。

～第五話～二日目～昼、沖島ユウとの会話～（前書き）

はう、零堵です。
続きの話です。

～第五話～二日目～昼、沖島ユウとの会話～

主人公の孝之と二人で登校し、私立白陵高校にたどり着いた。
俺は、主人公と同じクラスで、席も隣同士なので、迷う事は無く
自分のクラスの中に入り、自分の席に座る。
座ってから、鞄を置いて、ノートや教科書を机に入れてると
「あ、そうだ、舞？」
「何よ」
孝之が、話しかけてきた。
「映画見に行かないか？」
「映画？」
「ほら、最近、舞と行ってないだろ？だから、行こうと思って、今日とかどうだ？」
「そうね・・・」
俺は、考える。
最近と言うことは、前にも二人っきりで行った事があるというのか？
羨ましい奴め！と思ったが、この世界での映画って、一体何をやってるのか
物凄い気になった。二人で行くのも癪だが、俺はこう言う。
「判ったわよ、部活終わったらでいい？」
「ああ、構わないぞ、俺、教室で待ってるな」
こうして、映画に行く約束が出来たのであった。
そう話していると、キーンコーンと鳴って、先生がやって来る。
そして、授業が始まり、一体どんな授業をやるんだ・・・？と気になったが
男だった頃の世界とほとんど変わっていなく、これなら問題ないな・・・と、思ったので
真面目に聞く事にした。
そして、時間が過ぎて、お昼になった。

昼は、お弁当を用意してあるので、今日は学食に行く事はしなかった。
教室内で、お弁当箱を取り出して、開けてみる。
中に入っていたのは、卵焼きやウインナーやおにぎりが入っていて子供に人気がありそうな、ありきたりなメニューだった。
まあ、自分で作ったんだし、別に文句はないよな・・・と思い、食べる。
うん、料理上手と言うゲームの設定のおかげか、結構美味しい。
教室内で、弁当を食べていると
「あ、西嶋さんも弁当なんだ？」
俺に、話しかけてきたのは、ゲーム「ラブチュチュ」の攻略対象キャラの一人、沖島ユウだった。
沖島ユウは、男子の制服を着ているが、正真正銘女の子で、男装して、この学校に通っているのである。
まあ、自分から女だって言わない限り、バレナイんじゃないか？と思う。
だって、この西村舞の体と違って、胸が小さいし。
「うん、沖島君は？」
「僕は、学食行こうかなって思ってて・・・」
「あ、じゃあ、私のお弁当、少し分けてあげようか？」
「え、いいの？」
「いいわよ、はい、ど～ぞ」
そう言って、弁当のオカズを沖島ユウに差し出す。
ユウは、ありがとうと言って、一緒に食べる事にした。
うん、他人から見れば、男女がひとつのお弁当を食べているって光景なのだが
実際には、女同士なんだよな
ユウと一緒にお弁当を食べ終わると、ユウがこう言って来る。
「西島さん、お弁当ありがとね？」
「舞でいいよ？私も、ユウって言っていい？」

「あ・・・うん、じゃあ、舞・・・・で、いいかな？」
「いいよ？ユウ」
なんか、ユウが少し照れていた。うん、なんだ？ちょっとかわいいぞ？
そう思っていると、教室に孝之が戻ってきた。
孝之は、チャイムが鳴ってから、教室を出て行ったので
学食で食べに行ってたんだな？と思われる。
「あれ？ユウ？どうしたんだ？なんか顔、赤くないか？」
「な、なんでもないよ？孝之」
「ええ、何でもないのよ？孝之の気のせいだわ」
「そうか？」
孝之は、不思議な顔をしていたが、ここは黙っておく事にした。
そして、チャイムが鳴ったので、午後の授業に集中する事にしたのであった・・・

～第五話～二日目～昼、沖島ユウとの会話～（後書き）

こっちの物語も、書いてて結構楽しい感じですかね？
別の話に、気が付けば、攻略されそうです・・・も、あります
そっちを読んでから、こっちを見るのもいいですし
こっちから読んで、あっちを見るのもいいかもです。
お気に入りに入れてくださった方、ありがとうございました～

～第六話～二日目～午後、映画館～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第六話～二日目～午後、映画館～

午後の授業を普通に、終わって放課後。
俺は、部活に行く事にしたので、校庭へと向かった。
校庭にたどり着いて、陸上部の部屋と思われる、プレハブ小屋の中に入る。
中に入ると、昨日と同じく、ジャージに着替えている生徒が、結構いた。
俺もその中に入って、西村と書かれたロッカーを開き、ジャージに着替える。
着替え終わって、プレハブ小屋から出て、陸上部の顧問と思われる、山本先生がいたので
その近くに、集まる事にした。
山本先生もホイッスルを首に掲げて、ジャージ姿だった。
「はい、今日の練習を始めましょう、今日は、百メートルを三セットやるわ、皆、位置について」
そう言ったので、俺もスタート位置に並ぶ。
そして、俺の番になったので、俺も走る事にした。
百メートルを三回走った後、山本先生がこう言ってくる。
「西村、前よりは、タイムが少しあがっているわ、この調子で頼むわね」
「あ、はい」
「じゃあ、次はリレー形式で練習よ、それが終わったら、今日の部活は終わりにします」
そう言って、リレー形式の練習が始まった。
三十分ぐらい、その練習をして、山本先生がこう言う。
「はい、今日の練習は、終わり、また明日、練習するから、体を休めるように、では、解散！」
そう言ったので、プレハブ小屋に行って、制服に着替える。

なんかもう、他人の女性の下着姿を見ても、何も感じなくなったな・・・と実感
まあ、自分も女になっちゃったし、こんなもんなのか？とも、思ってしまった。
着替え終わり、主人公が教室で待っているというので、自分のクラスに行くと
確かに待っていた。でも、寝ていた。
まあ、確かに待ってるって言ってたけど、寝る事はないんじゃないか？と思うのだが・・・
しょうがないから、起こす事に決めた。
「孝之、行くよ？」
そう言ってみる、しかし、起きない、じゃあ、どうやって起こそうか・・・と悩んだ末
とりあえず、殴ってみる事にした。
「孝之・・・えい！」
殴った瞬間、勢いよく目が覚めたのか、俺に向かって、こう言ってくる。
「痛って～！ま、舞、殴る事はないだろ～！」
「だって、起きなかったし」
「もっと優しく起こすとかあるだろう？・・・ったく、まあいいが・・・じゃあ、行くぞ」
「そうだね」
そう言って、俺と主人公は、教室を出て行き、映画館に行く事にしたのであった。
映画館は学校から歩いて、数十分先の駅の付近にあった。
やっている映画を見てみると、「戦いとは非常なり」のアクション物
「あたしと貴方のラーメン日和」と言う恋愛物
「ゾンビって、臭いっす・・・」と言うホラー物だった。
うん、内容がどれも凄い気になるのだが・・・
「舞、どれにする？」

「孝之は、どれが見たいと思ってるの？」
「俺か？そうだな・・・やっぱ、戦いとは非常なりかな、舞は？」
「私は・・・・どれもみたいけど、孝之の選んだものでいいわ」
「じゃあ、決まりだな」
そう言って、戦いとは非常なりを見る事にしたのであった。
映画館の中は、結構広く、お客さんを満員とはいかないが、結構入っていた。
そして、上映が始まり、集中して見る事した。
ストーリーは、ある男が家族を殺されて、その復讐の為に師匠に弟子入りして、強くなり、復讐者を倒すというストーリーで、ちょっと感動してしまった。
映画を見ていると、手に何か触れる感触があったので、見て見ると孝之が手を握ってきた。なんでだ？と孝之の方を見たが、こっちを見ないで映画を見ていたので
ま、いいか・・・と、そのままでいる事にした。
映画が終わって、映画館の外に出て、孝之がこう言ってくる。
「映画、面白かったな？舞は、どう思った？」
「そうね・・・確かに面白かったわ、続きが気になる展開ではあったけど」
「だよな、中途半端に終わったしな～、もうすっかり暗くなったし、帰るか」
「うん」
確かに、空を見てみると、日が沈んで夜になっていたので、俺は、そう言って
孝之と一緒に帰る事にした。
家にたどり着くと、孝之がこう言ってくる。
「じゃあ、また明日」
「また、明日」
孝之はそう言って、隣の家の中に入る。
そっか・・・隣同士だから、会う確率は、物凄く高いんだな・・・と

実感してしまったのであった・・・

～第六話～二日目～午後、映画館～（後書き）

気が付いたら、攻略されそうです・・・
連載終わったのに、アクセス数が百以上って凄いですねえ・・・
こっちの物語も連載しているので、よろしくです。
あと、気が付いたら、魔王の部下になってました・・・も、始めました～

～第七話～二日目、夜～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第七話～二日目、夜～

主人公と別れて、俺は、西村舞の家の中に入る。
「ただいま～」
そう言うと、奥の部屋からやって来たのは、西村舞の母親の
西村恵子さんだった。
「お帰りなさい、舞、今日はちょっといつもより遅かったけど、一
体どうしたの？」
「孝之と映画を見に行って、遅くなったの」
「孝之君と映画ねえ・・・あ、じゃあデートだったんだ」
「え・・・？」
あ、確かに二人っきりで、映画に行くとか
まんまふつ～のデートじゃないか・・・？と、改めて実感してしま
った。
まあ、過ぎた事をいつまでもくよくよするのも何なので、忘れる事
にした。
「ま、まあそうなるかな・・・」
「ふ～ん、舞もお年頃になったのねえ・・・孝之君が、彼氏にでも
なるのかな？」
「ま、まだ、そんな事、分からないよ・・・」
「まあ、いいわ、ご飯出来てるから、一緒に食べましょう？」
「は～い」
そう言って、俺は、恵子さんと一緒に、リビングに向かった。
リビングに向かうと、父親の新三郎がすでに座っていて、テレビを
見ていたりしていた。
「お、舞、おかえり」
「ただいま、お父さん」
「貴方、舞も帰って来た事だし、早速戴きましょう？」
「お、そうだな・・・じゃあ、戴くか」

そう言って、テレビを見るのをやめて、食卓に来る。
テーブルの上には、焼き魚にご飯に海苔に味噌汁といった
ほぼ和食な感じが置かれていた。
「じゃあ、戴きます」
「戴きます」
そう言って、三人で夕食を取る。
うん、焼き加減もばっちりで、みそ汁もおいしかった。
ご飯一杯だけで、満腹になったので、食事が終わると
恵子さんが、こう言ってくる。
「舞、お風呂も湧いてるから、入ってきなさい、着替えは、用意するわね？」
「あ、うん、分かった」
そう言って、俺はリビングを出る。
家の中を捜して、浴室と書かれた場所に入った。
中に入って、籠の中に着てる服を入れる事に決めて、服を脱ぐ。
着てる制服とスカートを綺麗に折りたたんで、籠の中に入れる。
下着姿になり、ちょっと恥ずかしかったが、それも脱いで、全裸になった。
タオルが用意してあったので、それを持って、風呂の中に入る。
最初にシャワーを浴びる事に決めて、シャワーを浴びる。
最初は冷たくて、驚いたが、段々慣れてきて、体を洗う事にした。
自分の体を見てみると、最初に飛び込んできたのは、やっぱり巨大な胸だった。
あらためて見てみると、乳首の色が薄ピンク色で、肌も結構綺麗な感じがした。
「やっぱりでかいなあ・・・ちょっと、触ってみよ」
そう言って、触ってみる。
触り心地は結構柔らかく、弾力があった。
「ん・・・なんか、気持ちいい・・・って、何やってるんだ・・・俺」

いつまでも触っているのもなんなので、体を洗う事にした。
どう洗っていいか分からなかったが、スポンジがあったので、それに石鹸を擦りつけて、泡を出して
体に塗ってみる。
それを全身に満遍なく塗りまくり、最後にシャワーで洗い流して
最後にシャンプーで頭を洗った。
洗い終わって、湯船に浸かる。
湯船につかると、胸が浮き上がった。
おっぱいって浮くんだ・・・と、思ってしまった。
長時間入っていると、のぼせてしまうので、キリのいい所で、浴槽から出ると
父親の新三郎と出くわしてしまった。
「あ・・・」
「ま、舞、これはだな？ちょっと手を洗おうとしてだな？」
「・・・・・用事を済ませたら、出てって」
「わ、わかった、それより、舞、ナイスバディーだぞ？」
そう言って、新三郎は出ていく。
あ、もしかしてふつ～の女の子だったら、今の所って悲鳴をあげればよかったのか？とか思ったが
まあ、別にいっか・・・と、思う事にした。
母親の恵子さんが言ったと通り、服が用意してあって
それに着替える事にした。
まず最初に、水色のパンティーとブラを付ける。
そして、用意された服も水色のパジャマだったので、全部水色で統一したのか・・・と、思った。
着替え終わって、舞の部屋に行く。
部屋の中に入り、ノートを取り出して、こう書く事にした。
「二日目、今日は主人公に映画に誘われる、映画の内容は結構面白かった。また何か主人公に誘われる事もあると思うが、その時はその時に考えて、臨機応変に動こうと思う、なお風呂に入り、改めて

西村舞の胸が大きいと、実感してしまった・・・ま、こんなものでいいかな」
そうノートに書いて、目覚ましの時計をセットする。
セットが終わり、ベットに潜って、少し考える。
本当に元の男にも出れるのだろうか・・・と、しかし考えても、体が変わる事も無く
女の体のままなので、なるようになれって感じだな・・・と思い
眠たくなったので、目を閉じる事にした。
こうして、俺の一日が終わりを告げたのである・・・

～第七話～二日目、夜～（後書き）

新春一発目の投稿です～
あけましておめでとうございます、今年もよろしくです。
この回は、気がつけばシリーズ恒例？のちょっとムフフなシーンありです。
これからも、この物語をよろしくです～

～第八話～三日目～朝～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第八話～三日目～朝～

ジリリリと目覚まし時計の音がして、俺は、起きる。
起きて、ベットから降りて、日付と時刻を確認する事にした。
日付は、七月三日の水曜日で、時刻は、目覚まし時計の設定した時刻六時となっている。
せっかく早起きしたので、部屋から移動して、キッチンへと向かった。
キッチンに辿りついて、お弁当の製作をする。
今日は、何にしようかな・・・と、悩んで、冷蔵庫の中に肉があったので
ハンバークを焼く事にした。
ハンバーグを焼いて、目玉焼きを作り、お弁当箱の中に敷き詰めていく。
その作業をしていると、西村舞の母親の、西村恵子がキッチンにやって来た。
「舞、おはよう」
「おはよう、お母さん」
「今日も、お弁当を自分で作ってるのね？」
「うん、焦がしてはいないから、上手に出来てるとは、思うけどね？」
「そうね・・・・ちょっと、味見していいかしら？」
「うん、食べてみて？」
そう言って、俺は、作った料理を恵子さんに差し出す。
恵子さんは、俺の作った料理を食べた後、こう言った。
「うん、見た目と味付けのバランスもいいから、おいしいわよ」
「よかった」
「じゃあ、私も、朝食を作ろうかしらね？舞、手伝う？」
「うん、手伝うよ」

俺は、そう言って、恵子さんと一緒に、朝食作りをする。
そして、出来上がったのが、炒飯を作った。
炒飯をお皿に盛りつけて、朝食を取る。
うん、見た目もバッチシだし、結構美味く、あっと言う間に食べ終わった。
食べ終わって、自分の部屋に戻り、制服に着替える。
着てるパジャマを脱いで、下着姿になり、制服を着る。
なんか・・・もう、女物の服を着る事に、抵抗とか恥ずかしさとか、全くなくなったような・・・と
思ってしまうのも、事実だった。
制服に着替え終わって、鞄の中に必要な物を入れて、外に出る。
向かった先は、隣の初崎孝之の家にだった。
孝之の家にたどり着くと、チャイムを鳴らす。
すぐに出てきたのは、孝之の母親だった。
「おはようございます」
「あら、舞ちゃん、今日も来たのね、孝之は、もう起きてるわよ？
孝之～、舞ちゃんが来たわよ～」
そう言うと、奥から孝之のこえが聞こえた。
「わかった、今、行く」
そう言ってから数分後、制服を来た孝之がやって来た。
「お待たせ、じゃあ、行くぞ」
「うん」
「行ってらっしゃい～」
そう言って、二人で、学校へと向かう事にした。
通学途中、孝之がこんな事を言ってくる。
「舞」
「何よ？」
「今日って、何か予定あるのか？」
「予定？・・・学校があるじゃない」
「学校はあるのは俺も知ってるぞ、学校が終わったらって事」

「それだったら、部活があるけど、終わった後は、何もないかな」
「じゃあ、また、俺、教室で待ってるよ、終わったら声かけてくれ」
「いたらね・・・」
そう言いながら、歩いていると、学校にたどり着いたので
自分のクラスの中に、入る事にしたのであった・・・

～第八話～三日目～朝～（後書き）

最近、イラストを書きまくってるような気がします。
そこで、この物語にもキャライラスト載せた方がいいでしょうか？
う～ん・・・だれか書いてくれたら、うれしいのですが・・・
キャライラストを載せるかどうかは、まだ、不明のままですね

～第九話～三日目～午前、沖島ユウとの会話～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第九話～三日目～午前、沖島ユウとの会話～

主人公の孝之と一緒に、学校へと向かう。
数十分通学路を歩いて、通っている高校に辿り着いた。
校舎の中に入り、孝之と同じクラスなので、同じ教室の中に入って自分の、西村舞の席へと座る。
席に座り、鞄を開いて、教科書やノートを机の中に入れて、入れ終わったらぼ～っとする事にした。
しばらくぼ～っとしていると、キーンコーンと鳴って、授業が始まる。
授業内容は、比較的簡単とはいかないまでも、黒板の文字をノートに写す作業に集中する事にした。
先生が、ここを詠んでみろとか、他の生徒に当てているので、俺も教科書とか読む羽目になるのか？
と、身構えていたけど、結局指される事は無く、授業が終わる。
授業が終わって、休憩時間
俺は、どうしようかな・・・と思っていると、俺に話しかけて来る者がいた。
「舞、今日って暇？」
話しかけてきたのは、同じクラスの沖島ユウだった。
沖島ユウは、男子の制服を着ているが、中身は、俺と同じ女子だったりする。
まあ、ず～っと男子の制服を着ている事から、誰にも女だって言う事は
バレテないみたいだな・・・と、思った。
「部活が終わったら、行く所が無いから、暇かな」
「じゃあさ？ボクとカラオケに行かない？この町に新しくオープンしたって聞いたからね？」
カラオケか・・・一体どんな曲があるのか気になったし、行ってみ

るのもいいかもな・・・と思って
俺は、こう言う事にした。
「いいよ、あ、孝之も誘っていい？丁度、私、孝之からも誘われてたし」
「うん、いいよ」
「じゃあ、決まりね？、ちょっと孝之に話してみるよ」
そう言って、俺は、机にうつ伏せになって、寝ている孝之を起こす事にした。
「孝之～」
そう言っても、返事が無かったので、頭に肘うちを食らわしてみた。
ゴッと鈍い音がして、孝之が目を覚ます。
「痛ってえ！今殴ったの、舞か！？」
「孝之が起きないから、実力行使をしたまでよ、でさ？孝之」
「ったく・・・お～いてえ・・・で、なんだ？」
「ユウから誘いがあってね？一緒にカラオケでも行かないかだって？孝之は行く？」
「行く、ユウと二人っきりで、舞に何かあったら、嫌だからな」
即答しやがった。そんなに行きたかったのか？こいつ・・・
それに二人きりって・・・あ、そう言えば、ユウは男装してるから女だって孝之は知らないんだっけ・・・、じゃあ見た目だと、男女二人でカラオケに行くって感じになるのか・・・
と言う事は、デートって感じなのか？これって・・・？
そう思ったけど、深く考えない事に決めて、俺は、こう言う。
「じゃあ、決まりだね？部活終わったら、声をかけるよ」
「ああ」
そう言って、孝之は再び寝だした。
授業始まると言うのに、何という態度なんだ？と思うのだが・・・
ほっとく事に決めて
自分の席に戻る。
そして、キーンコーンと、鳴ったので、授業に集中する事にしたの

だった・・・・

～第九話～三日目～午前、沖島ユウとの会話～（後書き）

この物語にもキャライラスト書くかどうか迷うって感じですかね～
ちなみに、今日見たら、気がつけば・・・攻略されそうです・・・
のＰＶアクセス数十万人突破しました。
うん、終わってから突破って・・・ま、いいですけどね～
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第十話～三日目、昼、沖島ユウと秘密の会話～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十話～三日目、昼、沖島ユウと秘密の会話～

授業が進み、昼休み。
俺は、自分で作ったお弁当箱を広げて、食べようとする。
お弁当箱を開いて、食べていると、俺に話しかけて来る者がいた。
「舞、なんか美味しそうなお弁当箱だね？」
そう言ったのは、同じクラスの沖島ユウだった。
ユウもお弁当箱を持っていて、中身が気になったので、俺は、こう言ってみる。
「あ、なんだったら、交換しながら食べない？」
「あ、それいいかも？じゃあ、一緒に食べようか？」
そう言って、二人でお弁当を食べる事にした。
ユウのお弁当を見てみると、焼きそばに野菜炒め、おにぎりといったコンビニとかで売ってそうな、メニューだった。
「これって、ユウが作ったの？」
「うん、もともと料理は好きだからね？あ、舞も自分で作ったの？」
「そうよ？美味しくできてると思うから、食べてみて？」
「じゃあ、いただくね？」
そう云って、ユウは、俺のお弁当に手をつける。
そして・・・
「うん、うまい、舞って料理上手なんだ？」
「そんな事はないよ、あ、私もユウのを頂いていい？」
「いいよ？はい、ど～ぞ」
そう言って、俺は、ユウのお弁当を食べる事にした。
食べてみて、思った事は、ユウも料理上手で、結構美味しく感じられた。
「あ、美味しいよ？ユウも料理上手じゃない」
「ありがとう、まあ、普段作ってるからね」
「ふ～ん」

そう言いながら、食べ終わる。
食べ終わってから、ユウがこんな事を言ってきた。
「でさ？舞、カラオケの事だけど、孝之は誘えたの？」
「うん、誘えた、孝之も行くってさ？」
「そうなんだ」
「うん、あ、ところでさ～？」
俺は、気になったので言ってみる事にした。
「何？」
「ユウってさ？孝之の事・・・・好き？」
「ええ！？な、なんでそんな事を？」
「いや、気になったからさ？で、どうなの？」
「ボ、ボクは男だから、孝之はボクの事を好きにならないと思うんだけど・・・」
「私、知ってるんだけど？」
「し、知ってるって？」
「ユウが、女だって事」
「な、ななな何言ってるの？」
「大丈夫よ、私、言いふらしたりしないからさ？でさ？どう思ってるの？」
「・・・言いふらしたりしない？なら・・・そうだね・・・孝之はいい奴だと思うよ、ボクにもよく話しかけてくるし、これが恋愛感情かなのかは、まだ解らないけど・・・」
「そうなんだ、じゃあ孝之の事を好きになったら、私、応援するわよ？」
「ええ？た、孝之は舞の事が好きなんじゃない？よく、一緒にいるし？」
「まあ、幼馴染だから家におこしに行ってる訳ですよ、言わば腐れ縁？って感じなわけ、今の所、私は孝之に恋愛感情なんて、ないわよ？ユウは、そういった感情とかない？」
「ボクか・・・、ま、まあちょっとは、孝之の行動を見た時にドキ

っとはするけど・・・、まだよく、解らないよ・・・」
「そういうものなのか・・・まあ、私は孝之と恋愛するつもりは、ないから、孝之の事を好きになったら、私は応援するわよ」
本当に、そうなったらいいかもな・・・って、思っているので
そう言ってみると、ユウは、何かを考えて、こう言った。
「うん、そういう事になったら、がんばってみる」
「そう、がんばってね」
そう言っていると、教室に戻ってきた孝之が、こう言ってきた。
「あれ？舞とユウ、何を話してたんだ？親密そうに」
「なんでもない、孝之には関係ないことよ？ね、ユウ」
「う、うん、そうかも、孝之には、関係ないかな」
「何だよ、気になるじゃないか、教えろよ？」
「や～だ、あ、そろそろ授業始まるわよ」
そう俺が言うと、「ちぇ・・・気になるが、まあいいか・・・」と言って、孝之は、自分の席に座る。
と言っても俺と隣同士なので、結構距離が近かった。
ユウも自分の席に戻っていく。
そして、キーンコーンと鳴ったので、午後の授業に、集中する事にしたのであった・・・

～第十話～三日目、昼、沖島ユウと秘密の会話～（後書き）

はい、零堵です。
今日、西村舞のキャライラストをプロフィールに載せました。
キャラの感想とかくれると、うれしいですねえ
これからも、この物語をよろです～

～第十一話～三日目～午後、カラオケ～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十一話～三日目～午後、カラオケ～

グラウンドに向かうと、陸上部の顧問と思われる、山本先生が、俺にこう言って来る。
「西村、早く着替えて来なさい」
「あ、はい、分かりました」
そう言って、校庭にあるプレハブ小屋に向かう。
プレハブ小屋にたどり着いて、中に入り、西村と書かれたロッカーを開き
着てる制服を脱いで、ジャージ姿になる。
他の女生徒も着替えの真っ最中で、下着姿がほとんどだったが
全くと言っていいほど、興奮しなかった。
この状況に馴染んでしまったんだな・・・と改めて実感し、着替え終わって、プレハブ小屋を出る。
グラウンドに陸上部の生徒が集まっているのを見かけたので、俺もその中に入る事にした。
ホイッスルを首から下げた山本先生が、こう言って来る。
「今日は、百メートル走を五本セットでやるわ、あまりやりすぎるのも体をいためるので、今日はそれぐらいよ？さあ、準備して！」
は～いと皆言ったので、俺も準備をする。
そして、俺の番に百メートルのタイムを計った。
計った後、山本先生に報告すると、山本先生はこう言ってきた。
「今日は、まあまあのタイムね？この調子で頼むわ」
「はい、分かりました」
「今日は、もう部活をやめていいわよ、それとも残って練習していく？」
「いや、今日はこれから用事があるので、お先に失礼します」
「そう、お疲れ様、明日も部活あるから、よろしくね」
「はい、分かりました」

そう言って、俺はプレハブ小屋の中に入り、制服に着替える。
ジャージを洗おうと思い、スポーツバックの中に入れて、小屋の外に出る。
小屋の外に出て、教室に向かって、教室内に入ると、孝之とユウが待ってたみたいなので、声をかけた。
「部活終わったわよ」
「お、そうか、今日はいつもより早く終わったような気もするが、まあいいか、じゃあ行くぞ」
「ＯＫ～、ボクも着いていくよ」
「りょ～かい」
そう言って、三人で教室を出て行って、外に向かった。
町の中を数分歩き、駅周辺にたどり着いて、近場にカラオケ店を見つけたので、そこに入る事となった。
カラオケ店の名前は「ネオ・エコー」と言うらしく、何がネオなのか全くわからなかった。
店内に入り、一緒の個室にして、中に入る。
内装はブルーをイメージしているらしく、ライトも少し青くて、結構綺麗な色をしていた。
「じゃあ、最初に誰から歌う？」
「じゃあ、ボクから行くよ、孝之、あとでデュエットしよう」
「何で俺が、ユウと・・・？ま、いいけどな・・・」
そう言って、ユウが歌いだす。
おお、高音ボイスで結構上手く、全くミスもしないで、完璧に歌い上げていた。
曲が終わると
「じゃあ、俺の番だな？行くぜ～」
そう言って、マイクを持ち、曲が流れる。
曲調からして、デスメタル風だった。まさか、孝之がこんな趣味だったとは・・・

かなり、驚いてしまった。
しかも声を張り上げて歌っているので、かなり上手だし。
曲が終わって、「どうだ？俺の歌は？」とか聞いてきたので、俺はとりあえず
「よかったよ？」と言ってやる事にした。
俺の番になったので、曲を入れる。
この世界と前の世界とは、歌が全く同じだったので、男だったときに歌っていた曲をセレクトした。
俺が歌い終わると、孝之が
「舞って、そんな歌が好みだったのか・・・意外だな・・・」
「孝之に言われたくないんだけど？」
「まあ、いいんじゃないかな？人、それぞれの好みだしさ？」
「まあ、そうだな、じゃあ、曲をバンバン入れるか～」
そう言って、孝之は歌いまくる。
俺はどっちかと言うと、たくさん歌う事はしないで、数曲程度にしといたのであった。
時間が来て、店内を出ると、外はもう真っ暗だった。
三人で歩いていると、ユウがこう言ってくる。
「じゃあ、ボクはここで、別れるよ？今日は楽しかった、また誘ってね？じゃあね」
そう言って、ユウは離れて行く。
「また誘ってって・・・俺と行きたいって事か？それとも舞と・・・？」
「ん？孝之は、気になるの？もしかして・・・ユウの事を好きになった？」
「な、何言ってるんだよ？ユウは男だろ？そんな訳ないって」
「ふ～ん・・・」
本当は女なんだけどな・・・ここでばらすか？いや
ユウに秘密にしとくって言ったし、ここは、黙ってる事にするか・・・

俺は、そう思っていたのであった・・・

～第十一話～三日目～午後、カラオケ～（後書き）

はい、零堵です。
続きの話です。
この物語も書いていて、結構楽しいです。
お気に入りに登録してくださり、ありがとうございます～
キャライラスト、追加しました。

～第十二話～三日目～夜～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十二話～三日目～夜～

主人公の初崎孝之と別れて、俺が家に辿り着く。
家の中に入ると、母親の西村恵子さんが出迎えてくれた。
「お帰りなさい、舞、今日は遅かったわね？」
「孝之とちょっとカラオケに行っててね・・・あ、お母さん、これ、出来れば洗って欲しいかな？」
そう言って、俺は恵子さんに、手に持っているスポーツバックを渡す。
「この中にジャージが入ってるから、それを洗ってほしいの」
「解ったわ、洗っておくわね？あ、お風呂湧いてるけど、入るでしょ？」
「う、うん、入る」
「じゃあ、入ってきなさい、バスタオルと着替えは、用意してあげるから」
「は～い：
そう言って、俺は浴室へと向かった。
浴室に辿り着いて、着てる制服を脱ぐ。
下着姿になり、ブラとパンティーも脱ぎ、裸になった。
改めて見てみると、結構な胸があり、肌もスベスベだった。
男だった時、こんなにスベスベしてないよな・・・と思いながら、シャワーを浴びる事に決めて
シャワーのノズルを捻る。
温度が丁度いいくらいに設定されており、スポンジに石鹸をつけて、体を洗う事にした。
まず首筋からやって、腕を擦り、胸を洗う。
胸を触るたび、結構揺れ動くので、ちょっと洗いにくく
しかもなんか少し気持ちいい感じがしてしまった。
「ん・・・・」

思わずそんな声が出てしまい、はっとしてしまって、胸を弄るのをやめる。
次に脹脛や足首を洗い、最後に股間を洗う事にした。
結構大事な部分だとは、思うので慎重に洗っていく
触っていくうちに、なんか変な気分になってしまい
鏡があったので見てみると、顔が赤くなっていた。
これが俺・・・？なんかエロイ・・・
この姿を男が見たら、襲いかかってくるんじゃないだろ～か・・・
と一瞬思ってしまった。
って、そんな考えをやめる事にして、最後にシャンプーで頭を洗う事にした。
頭をゴシゴシと洗っていき、洗い終わってから湯船に浸かる。
湯船もいい温度に設定されていて、足をのばしてリラックスする事にした。
つい、気持ちよくて鼻歌も口ずさんでいると
浴室の外から
「舞、着替え、ここに置いとくわね？」
恵子さんの声が、聞こえたので、俺は、こう言う。
「あ、うん、ありがとう、お母さん」
「あんまり長湯しちゃだめよ？」
「りょうか～い」
そう言ってから、五分間入り、出る事にした。
バスタオルが用意してあったので、それで体を拭いて、着替えが籠に入っていたので
それを着る事にした。
下着を見てみると、パンティーの色が緑色をしていて、端に蝶の模様が描かれていた。
一体どんなセンスなんだ？これ・・・思ったが、せっかく用意してくれたので
それを履いてみる。

なんか、履き心地がバッチリで、ジャストフィットした。
次にブラを見てみると、お揃いなのかこっちも同じ蝶がデザインされている。
サイズもぴったりで、戸惑う事なく装着する事が出来た。
装着してから思うのだが・・・
男だった俺が、こんなに簡単にブラを装着出来るなんて・・・やばいんじゃないか？とか思ってしまったのである。
まあ、深く考えない事にして、用意された服を着る。
これも、緑色に統一されていた。
着替え終わって、リビングに行くと、恵子さんと父親の新三郎がいた。
テーブルの上に、料理が置いてあったので、これから夕食か・・・と思ったのである。
「あ、舞、あがったのね？」
「うん、それよりお母さん・・・気になったんだけど？」
「何？」
「あの下着のデザインは何？なんであんなのを？」
「あら、それはね？舞だって、もう高校生なんだし、大人っぽいのでもいいと思ったのよ、それに、男を落とすんだったら、あのぐらいじゃないとね？あ、でもちゃんと避妊はするのよ？まだ高校生なんだし」
「舞、好きな男でも出来たのか？出来たなら、お父さんに言うんだぞ？」
「す、好きな男なんていないって、それに性行為とか、私はしないから！」
「そう？まあいいけど、それより夕飯が覚めちゃうわ、戴きましょう？」
「う、うん、戴きます」
「戴きます」
そう言って、三人で夕食をとる。

夕食は、海の幸が入っている、シーフードカレーだった。
一口食べただけで、海の幸が口いっぱいに広がって、かなり美味しくあっと言う間に、食べ終わってしまった。
「ごちそうさま」
「恵子さん、もう一杯くれるかな」
「はい、解りました」
そう言って、新三郎はおかわりをしている。
俺は、食べ終わったので、自分の部屋に戻る事にした。
舞の部屋と書かれた場所に辿り着いて、早速ノートを開く。
ノートを開いて、ノートにこう記す。
「三日目、今日は沖島ユウと、主人公の初崎孝之と三人で、カラオケに行く、沖島ユウと孝之をくっ付けるのもありかと思うが、まだ他の攻略対象キャラがいるので、その攻略対象キャラに会ってから、どうするか考えようと思う・・・まあ、こんな感じでいいかな・・・」
そう書き記して、ノートを仕舞う。
明日の準備をして、目覚ましをセットし、布団にもぐる。
布団の中で、明日はどうするかな・・・と、考えて
他の攻略対象キャラに会ってみようと、思う事にして、瞼を閉じる。
こうして、今日の一日が、終了したのであった・・・

～第十二話～三日目～夜～（後書き）

はい、零堵です。
定番の夜のちょっとムフフなシーンありですw
この物語もよろしくお願いします。
他にも気が付いたら、魔王の部下になってました・・・があるので
そちらもよろしくです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6647z/

気が付いたら、攻略されそうです・・・～西村舞編～

2012年1月11日07時49分発行